

ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』と フランク・マコートの『アンジェラの灰』

James Joyce's *A Portrait of the Artist as a Young Man* and
Frank McCourt's *Angela's Ashes*

福 岡 眞知子
FUKUOKA, Machiko

Abstract

In the last paper, I investigated and compared Frank McCourt and James Joyce and concluded 'James Joyce's stance, ambition and artifices flow into Frank McCourt's bold and shy little experimental thick memoirs though there are several differences between them, their directions of writing as well as their intentions' (Fukuoka 55).

This paper pursues seven points that could be traced as major similarities between James Joyce's *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) and Frank McCourt's *Angela's Ashes* (1996). The similarities: memories of their autobiographical developmental records by memory; their father's tradition as storytellers; their father's alcoholism and their family's disastrous decline; poverty and their description of their brothers; their suspicion against the Catholic Church; their criticism of teachers' and priests' violence; and sins and crimes and their sense of guilt.

We also found that there are differences between the two Irish 'exiles.' Joyce and Stephen Dedalus in *A Portrait* aimed for the success as 'the artist' and the modernization of the art of a language, while McCourt headed for the realization of an American dream as a teacher and a writing master. Moreover, one of their big differences was traced as the point that McCourt attacked the poverty and misery of Irish childhood and children. He identified the cause of this problem and moved the hearts of Americans as well as his students.

Key Words: James Joyce, Frank McCourt, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, *Angela's Ashes*, Irish literature

はじめに

Frank McCourt (フランク・マコート。以下、「マコート」と記す) (1930-2009) の代表作である *Angela's Ashes: A Memoir of a Childhood* (以下、『アンジェラの灰』と記す。引用は後掲のFlamingo版を定本として用い、ページ数のみを示す) は、1996年に出版され、1997年にピューリッツァー賞を受賞した「アメリカ人による自伝」で、世界で600万部という大ベスト・セラーになり、1999年にはハリウッドで映画化された。

1997年1月に放送された『アンジェラの灰』についてのインタビューの最初で、聴き手(Allan Gregg)がJames Joyce (ジェイムズ・ジョイス。以下、「ジョイス」と記す) (1882 - 1941) を引き合いに出している。アイルランド系アメリカ人であることも踏まえて、マコートは「ジ

ョイスに次ぐ」との評価を受けていることを紹介しているのである。そして、マコート本人もこれを否定していない。

確かに、数多くの点で、『アンジェラの灰』はジョイスの作品の後継である。このインタビューで、本作が子ども視点で描いているという指摘を受けて、マコート自身はジョイスやフォークナーではなく、*Alice in Wonderland* の視点を探っているのがよかったのだと分析しているが、芸術家としてのアイデンティティーの確立までをジョイスが描いた *A Portrait of the Artist as a Young Man* (『若い芸術家の肖像』。以下、『肖像』と記す。定本としては後掲のGarland版を用い、引用は章番号をローマ数字で、行数をアラビア数字で示す)こそ、マコートが意識して伝統として引き継いだ作品であろう。

本論文は、『アンジェラの灰』が、題材、描き方をはじめ、根幹にかかわる点で、どれほど『肖像』を「伝統」として受け継いでいるかを主要な7点を挙げて論証し、

さらに、本作品が『肖像』からどのように進んでいるかを明らかにする。それとともに、『アンジェラの灰』からマコートが、社会性など『肖像』とは異なる新たな方向を追うことで、逆に追求しなかった道も指摘して、「芸術家」ジョイスの『肖像』の意味を問い直すことを目指す。

1. 自伝：記憶による成長記録

『肖像』はStephen Dedalus (スティーヴン・ディーダラス。以下、「スティーヴン」と記す)の幼いころの記憶のことばから始まり、故郷を離れて芸術家になろうと決意することばで閉じている。最初が「むかしむかし、もうもうさんがおりました」から、つまり母親への言及から始まり、家を離れていこうとする息子に母親が衣服を整えながら祈り、息子がそこから旅立とうとする日の日記で終わる。さらによく読むと、最初の語りは肉体的な父親のことばで、主として三人称で語られる(スティーヴンを「私」あるいは「ぼく」ではなく「彼」として記述している)地の文に不分明に導入にしてあり、最後の記述は「いにしへの父よ」と魂あるいは芸術上の父に呼びかける日記文の「私」のことばであることがわかる。さらに、本文から一行空けて、最後の最後に、「1904年ダブリン」の行の次に、「1914年トリエステ」と記してある。ジョイスがこの作品を、1904年にダブリンをあとにした時から書き始め、1914年にトリエステで書き終わったという記録をしているのである。

'His father told him that story: his father looked at him through a glass' (I.5) と 'He was baby tuckoo' (I.7) を丸谷才一訳ではそれぞれ、「おとうさんが、そのおはなしをしてくれた。おとうさんは、かたっぽめがねでぼくを見る。」「くいしんぼぼうやというのは、ぼくのこと。」として、語り手の「ぼく」が書かれているように感じさせるが、原文は、最後の日記体の直前まで、すべて、Stephen と he というように、三人称で記述している。

これから、『肖像』は、まず、言葉も文体も芸術家の成育の記録としてスティーヴンが三人称で書き、これを額絵にして、最後に芸術家として自立しようとしているスティーヴンがその時の日記を一人称体で付け加えて額縁にした形にしている、1914年にジョイスが全体として完成させた「肖像画」であることが明らかにしてある。

いっぽう、『アンジェラの灰』は、作者マコートの父母がニューヨークからアイルランドのリムリックに戻って来た、作者4歳の時から始めてはいるが、すぐに父母の結婚、作者の誕生に話を戻し、第1章はニューヨークのブルックリンでの子ども時代の記録に多くを割いている。最後から2番目の第18章で、19歳になったマコートは渡米しようとする。このとき母親のアンジェラが泣く。最

後は、めでたくハドソン川にたどり着いた船上から街の灯りを眺め、船とともに旅してきた通信士に、目の前のアメリカを「まったくすげえ国じゃないか」と言われる。最終の第19章は、ひとこと、「Tis' (「ですわね」) (364)とだけ記してある。第18章の通信士の声かけへの応えとなっているのである。

このようにマコートの『アンジェラの灰』は、誕生時の伝聞記録から始まってはいるが、主としては記憶した幼時から自立の時までを記述している点で、『肖像』をなぞっているとみなされる。しかも、二作ともに、肉体的な父親から離れ、自らが父と頼む新たな存在に出会おうとしている、希望に満ちた青春期のいぶきが最終場面を感じられる、肯定的なビルドゥングスロマンであるとみられる。

しかし、同じ成長発達と自立の記憶をたどった作品でありながら、冒頭の章で『アンジェラの灰』は、直線的、時系列的に語るより、ひとひねりして父母が移民として失敗して故国に舞い戻ったところから始め、いったん「リムリックのスラム」とマコートが呼ぶ場所を出発点にすることで、マコートの人生のスタートがいかに苛酷なものだったかを明確につかませている。

冒頭の第3段落で、早くも、本書の「テーマ」を明示している点は、『肖像』の、全体を通してはじめて「テーマ」が見える描き方とは、大きな相違をなしている。

あるいは、逆にもとれる。『肖像』は、題名そのものが「テーマ」を示しているのに対して、『アンジェラの灰』という題名は、むしろ、「暗喩」である。この作品を通して、アンジェラ、つまりマコートの母親は、語りの対象にはほとんどなっていない。その姿をとるところに記しているが、一貫して追いかけているのは、「ぼく」の見たこと、聞いたこと、その語りであり、「ぼく」は母親だけではなく、父親、兄弟、親戚、近所の大人たちの言動を描きつづけている。

マコートがニューヨークの高校教師として大成し、定年を迎えたあとで、ようやくフルタイムの執筆家の境遇を得てこの作品を書いたことは、ピューリッツァー賞を獲ってからのインタビューなどで知られている(グレッグのインタビューなど参照)。その年齢で、ライティングの教師を長くしてきた知識と経験を用いて、読者対象を18歳までの高校生と定めて、その段階の子たちに訴える力を持ったものを書くようにしたのであった。そこで、その執筆方針は、「単純明快」ということになった。60歳代の、古典も現代文学も読みに読み、解釈の知識も持ち、どのような新しい文学手法があり、かつ、どのような語彙、内容、文体が多くの高校生の心をつかむかを知悉している人物が書いた「モデル的な作品」が、『アンジェラの灰』である。採用された語彙はニューヨークの高

校生が理解できる範囲であり、思春期の子どもたちが興味を持つ内容であり、かつ、ジョイスが行った文体実験も取り入れた現代的な文体であった。そこにまた、アイルランド的、言い換えればエスニックな語りの伝統も取り入れて、革新性を出している。できあがったのは、文学的な素養とぎりぎりの伝統革新を練りこんだ、19歳の「少年」の一人称の語りによる、1930-40年代のアイルランドの極貧のカトリック教徒の子どもの成長記録である。

いっぽう『肖像』は、ダブリンの中産階級の子どもの成長発達と自立の物語であるが、語り自体が成長発達をとげることまで仕組まれている。幼児に聞こえた父親のことばから始め、20歳前後にアイルランドを離れてヨーロッパ大陸に向かおうとして自ら父と定めた伝説の工匠に呼び掛ける自らの声で終えている。つまり、認識の成長発達を言語発達で描写しているのである。さらにそのような語りの外枠に、書き手の現実世界の時間の流れを記録することで、作者ジョイスが「アレンジャー」あるいは「創造者」として存在していることが読者に意識されることを要求している。つまり、『肖像』は、平易な娯楽的あるいは教育的な作品ではなく、また、ノンフィクションではなく、ドキュメンタリー記録ではない。Albert Wachtelが断言しているような“baby tuckoo” is Stephen, Stephen is James Joyce (Wachtel 2012: 10)と簡単に見ては本質を見誤ったことになる。読者を通常レベルの教養を持った青少年とは想定していない。作者が10年かけて巧みに創り上げた芸術作品として、作者と同程度の知識、興味、教養を持った読者に、ある意味、挑戦的に新しい文学として提示しているのである。そこで得られる言語芸術家の成長発達の姿は、作者の自画像をはらみながら、最先端の言語芸術とはこのようなものである、との作者の自負を反映したものになっている。この点で、マコートの思い出の切り取り記録とは異なる意図をもっていったことが注目される。

マコートの『アンジェラの灰』は、ニューヨークの高校生たちから「聴きたい」とねだられ、生徒たちに少しずつ語ったり書いたり読み語ったりしてきた回想の記をもとにしている。しかも、自身の「貧しい子ども時代」への興味に対して応えようという気持ちと、貧しさの分析から得た結論を世に示したいという欲求が動機になって編まれたものであった。

2. 父親：語りの伝統

マコートの自伝は、最終的には三部構成になった。『アンジェラの灰』で作者が誕生して19歳で渡米（再渡米）するまでを、'Tis（『ですね』。邦訳名『アンジェラの祈り』）で渡米してから母アンジェラの遺灰を故郷の墓地に

撒くまでを、そして *Teacher Man*（『先生よお』）でニューヨークでの教師生活を書いた。

第1巻目である『アンジェラの灰』で、読者は、最初の1行目から、作品の性質を見抜ける。逆に言えば、この書の語りに対する態度を決めさせてもらえる。‘My father and mother should have stayed in New York where they met and married and where I was born.’ (11)とあり、両親はニューヨークで出会って結婚し、作者がニューヨークで生まれたが、両親はそこにとどまらなかった、という事実を、いきなり「とどまるはずだったのに」とひねって書いている。これはすなわち、本書は作者が語り手になっている一人称体の自伝で、その語り口は、「ひねり」が基本だとすぐにわかるようにしているのである。

次に、「子ども時代をふり返ると、どうやって生き延びたんだろうとふしぎだ」と語り、‘It was, of course, a miserable childhood’ 「もちろん、みじめな子ども時代だったのだ」(11)と言う。「もちろん」には、読者の推測への肯定がある。語るに足るのはみじめな子ども時代の話で、聞くに値するのは幸せな子ども時代の話ではない、という人々の常を「前提」として暴露してみせているのである。人間は、他人の不幸話を喜ぶ、と。そして、誇らかに、「みじめなアイルランドの子ども時代ほど悪いものはない」、ましてや「アイルランドのカトリック教徒の子ども時代ほど悪いものはない」と最悪世界一自慢をする。

世界一自慢。これが、本書の語りの特徴のひとつであり、まさに、アイルランド性である。何であれ、「世界でいちばん」を目指して語るのが常套的で、そのことが彼らの語りの欲求をいや増しにし、同時に、彼らの語りを聴き手にとっておもしろくしてしまう。

さらに、冷静客観的に事実を描写しているかと思うと、するつと恐ろしいきつい冗談が語られる。本論文の4節に挙げた引用箇所を参照されたい。

あまりにも悲惨な事実を描きながら、必ずこっけいな面をとらえて語って笑わせる。泣き笑いを誘う。聴く者は、いっそう哀しくなりながら、人間のおかしさをのがさず笑わないではいられないのである。底辺のまだ下とも言えるところに落とされた人間の放つ強さをいやがうえにも感じさせる、哄笑を伴う語りの持つ迫力である。笑うしかない、というほど、現実があまりにも悲惨だということであり、悲惨なのに、笑ってしまう人間の強靭さが生き延びる希望になっている。「死んだ鍋」と呼ばれるアイルランド特有のユーモアの流れを、脈々と受け継いでいる。

このような語りは、19歳までの大半を過ごしたアイルランド、リムリックで育まれたものに違いない。

なかでも、成育歴で本人もかけがえのない瞬間として繰り返し(『ですね』でも)記録している父親の語り、大きな遺産として受け継がれていると言えよう。父は、ニューヨークで、クーパーリンにまつわるアイルランドの昔話をマコートだけに語り聞かせてくれたり、独創のブラジルの冒険談をマコートと弟のMalachy(マラキ)に語ってふたりを喜ばせてくれた。リムリックでも、しらふのとき父親は、早起きして、長男のマコートを伴って散歩に出た。そこで、アイルランドの歴史や伝説を、朗々と語って聞かせ、記憶させた。あるいは、暖炉の前で、お茶を入れながら、話し聞かせた。マコートはこの思い出のために、彼が10歳のとき家族を捨ててしまった父を、心底には憎み切れなかった。彼は1985年、ベルファストまで行って父の葬式に出て、棺桶で小さくなっている死に装束姿の父に、泣き笑いをする。父が酔って帰宅しながら歌い上げた愛国の歌も、マコートがニューヨークに行っても頭から離れない。父の語り部の血統が、マコートに流れ、父が語った物語が「history(歴史)」として脳に刻まれている。教室でのマコートの物語る力、体験の中からエピソードを選択し、悲哀とデフォルメを加えたおかしさを合わせ持たせて聴き手を惹きつける語りの技能は、まさに、父から受け継いだものだった。

やがてニューヨークでマコートが必死で追い求める夢は、父の語りのさらにさきにある、いわば父親たちの文化的伝統、文学という言語的伝統を推し進める道であった。貧しさからろくに学校教育を受けられず、いわゆる児童労働を強いられていたマコートだったが、父の語りの次に、すでにリムリックで、入院中にシェイクスピアに出逢い、おもしろさにとりつかれていた。渡米後に彼は、苦学して私立ニューヨーク大学教育学部に入り、古典から現代文学をさらに読み、ライティングの教師になっていく。やがては、大学院で、ジョイスの友人だったオリヴァー・セント・ジョン・ゴウガティーを研究するまでに至った。アイルランドの最高の物語作家たちの伝統をものにし、こんどは、高校生たちに文学的伝統とその革新を教えていったのである。

いっぽう、『肖像』もまた、前節でみたように、父親の語りから始めていることからわかるように、たいへんな話し好き、語り好きの父親が前面にある。その遺伝子と遺産を受け継いだ息子の文学的伝記という構成である。受け継いでいるのは、父親の物語力だけではない。父の受けた教育、文化、歴史など、およそあらゆるものであり、息子たるステイヴンは、それらをことばとして浴び続ける。ことばが伝えるものの中には、Hélène Cixous(Norton版『肖像』:365)が指摘しているように「法」があり、それが息子を支配する。

次にステイヴンが吸収し格闘するのは、教師かつ神父というもうひとつの父親存在とそのことばと文化である。カトリック神学、説教のことば、イエズス会師の教えなどであった。彼は、これらを血肉化しながら、自立にさいしては、ギリシャの伝説の工匠を父にすえて、これを象徴として、言語芸術の工匠になるべく、旅立つ。父親の言語の伝統を、さらに飛躍的發展をさせる覚悟である。ステイヴンの語りには、彼の前の限りない父たちのことばの伝統が流れ込んでいた。

このようにみえてくると、『アンジェラの灰』も『肖像』も、脈々として、父たちの語りとことばの遺伝子が受け継がれ、活かされ、それぞれに革新を目指して努力して鍛え上げられた作品であることが明らかになってくる。

3. 父親の飲酒と家族の破たん

『肖像』のなかの父親サイモン・ディーダラスは、「紳士」階級から次第に没落していく。その没落のようすは、主人公ステイヴンの教育に反映するように描かれている。ステイヴンは天才的な少年で、はじめこそ恵まれて、普通の子どもより早くClongowes Wood Collegeというイエズス会の経営する最著名校に入れたのだが、だんだん学校を変えていかせられる。やがて、住居地も、ダブリンの南方から北の方へと変えられていく。ここで、ジョイス自身は、貧困家庭の子を慈善で教育するChristian Brothersという教育施設に通うまでになっていた。彼は、このことを隠している。ステイヴンは、クリスチャン・ブラザーズに通ったとは書かれていないのである。それでも、没落と転居が書き込まれている。これが、ステイヴンの自尊心を傷つけ、屈折した心理を生じさせ、いわゆる「高慢な羞恥心」を抱かせることになった。最終学歴としては、アイルランドの支配階級であったイングランド系プロテスタントの貴族階級の息子たちがTrinity College Dublinを最高学府として通ったのに対して、カトリック家庭のステイヴンは、University College Dublinに入る。没落する過程で見た母の涙も、彼の心に深く刻まれていく。家族の苦難と没落の原因は、当時のアイルランド人の限界もさることながら、父親の飲酒癖と豪放な性格というものだったろう。

『アンジェラの灰』の父親は、もともとニューヨークに渡る必要がある貧困度だったところへ、仕事をして賃金を手にしては飲んで使ってしまう飲酒癖が災いしていた。帰国して最初に訪ねた北アイルランドから妻アンジェラの実家のあるリムリックに漂着してからも、さらに飲まざるにはいられず、北アイルランド出身であることも災いして仕事を失い続け、イングランドに出稼ぎに行き、しまいにはマコート10歳(一説には11歳)のときに妻子

を捨ててしまう。父親がいっしょの時期でも、マコートは、クリスチャン・ブラザーズに通う子以下の教育環境にいた。それがナショナル・スクールだった。

アルコール依存症は、今も、アイルランドのかかえる問題のひとつであるようだ (McCoy, McMahan, Alcohol Action Ireland 参照) が、ジョイスの『肖像』が描いている 1880 年代から 1904 年、マコートの『アンジェラの灰』が描いている 1930 - 40 年代についても、同様に問題になっていたことは否めない。酔わずにはいられないのは、あるいは寒く湿潤な風土に起因すると思われるかも知れないが、完全な独立を果たすまでのアイルランドにおいては、アルコール依存のほんとうの原因は、700 年、800 年と続いたイングランドによる植民地支配、その酷さだったろうとみなされる。長く続く支配、夢見て努力してもかなえられない希望、要職を支配者たちに占有されていることから来る甲斐のなさ、暴虐への絶望感、無力感、不信感がつのについていた。酒に手を出さなければならなかった、と認められよう。泥酔癖からの失職、酔いに任せた暴力や家庭内暴力、それによる女性たちの苦難は、あちこちに悲惨な現実を見せていた。さらに、主要生産物を宗主国の支配者たちにまさに搾取されてきたこと、加えて、カトリックの教えからの多産も伴う家族の貧困状況は、アイルランドをヨーロッパの最貧国と称される様相にしていた。

ただし、これはどの家庭でも、ということではなかったのだ。現代の Doren McMahan が指摘しているように (McMahan 2008)、アイルランド人は呑兵衛だというのは、偏見を持ったステレオタイプであり、真実ではないだろう。現に、マコートのリムリックの家の近所の男たちは、イングランドに出稼ぎに行っても、稼ぎを全部飲み代に使ってしまうということはなかったし、スティーヴンの幼時期を過ごした家の隣人たちも、酒の勢いで妻をないがしろにしたり、ましてや財産をなくしていくということが一般的であったとは記されていないのである。年齢の低いころから飲酒体験を持つことがあると、アルコール依存になりやすいとの研究がある。しかし、マコート本人は、節制ができた。

スティーヴンの父もマコートの父も、アルコール依存という弱点を持ち、アルコールが入ると気持ちが大きくなり、愛国的な歌を歌い、命令口調で妻や子を支配し、大風呂敷を広げて語りに語ったのである。それがもととともに、家族は困窮していき、実質的に父母ともに失ったも同然になって世の中に放り出されてしまう。

スティーヴンは、母をカトリック教会の教えに縛られて自分を完全には肯定してくれないという痛み、寂しさをかかえていく。いっぽう、マコートは、母がカトリック教会の慈善にすがりに行く姿に何度も接し、みじめさ

をつのらせていく。さらに、父親が家族を捨ててから、住む家もなくした母が親戚の男の奴隷のようになり果てるのを止められない。思春期に達し、ある程度理解ができる段階に達した彼は、4 人の子どもをかかえて食べさせて生き抜いていくために母アンジェラが自尊心をも捨てるしかなかったことを、涙を流しても耐えるしかなかったのだ。彼は、母と弟たちが寄食する家を出て、生後すぐに父親にあやすつもりで揺さぶられ投げ出されて脳と身体に障害を持つようになった伯父のもとに身を寄せる。願いかなって 14 歳で電報配達になり、経済的自立を果たし、アメリカに渡る夢を持ち、こつこつとお金をためていく。アメリカに渡ってからは、あとで渡米した弟たちはパブの主人になっていったが、ドックで働いたりしてから、大学に行き、前述のように、高校教師になり、最後はニューヨークでいちばんの有名校の教師になり、「今年の先生」にも選ばれるまでになった。さらには、アメリカの最高の賞をとり、有名になり、ハリウッド映画の原作者として世界中に知られるようになった。アメリカン・ドリームを体現したのであった。

アルコール依存症は、極貧の人びとの住む地区には多く、貧困や早期の飲酒体験が影響することは否定できない。しかし、これを克服するには、まさに、自他による「情報」と「教育」によることがいちばんであると、Daniel A. McCoy が結論づけている (McCoy 27-28) が、マコートの実例が、その証明になっていると言えるだろう。

さかのぼって考えれば、『肖像』も『アンジェラの灰』も、父の飲酒癖とその悪影響からの、子どもたちの自尊心を賭けた闘いと自立の物語であると了解されよう。

4. 貧困：兄弟姉妹の記述

没落と貧困を描いているという点で、『肖像』を『アンジェラの灰』が受け継いでいることを前節で確認した。次に、この貧困の描き方に焦点を当てる。

『肖像』の第 5 章で、大学生のスティーヴンは、偽名の書いてある数枚の質札をつまみあげながら、'watery tea' (V.1) を飲んでいる。家庭の経済状況の逼迫度がうかがえる。靴やズボンやコートを買入れし、紅茶さえ薄めているというのである。それでも、母親は、彼を大学の授業に送り出そうと、何人もいる妹たちに世話をさせようとする。長男の彼に、一家をあげて尽くして教育を受けさせているのがわかる。しかも、彼の家がどのような地域にあるか、彼が一步外に出たところを描いたことばで明かされている。

The lane behind the terrace was waterlogged and as he went down it slowly, choosing his steps amid

heaps of wet rubbish, he heard a mad nun screeching in the nuns' madhouse beyond the wall:

—Jesus! O Jesus! Jesus!

He shook the sound out of his ears by an angry toss of his head and hurried on, stumbling through the mouldering offal, his heart already bitten by an ache of loathing and bitterness. His father's whistle, his mother's mutterings, the screech of an unseen maniac were to him now so many voices offending and threatening to humble the pride of his youth. (V.55-65)

「台地」を「降りる」スティーヴンの足元は、'waterlogged' (びしょびしょに水浸し) で歩きにくく、'heaps of wet rubbish' (濡れたごみの山)、'the mouldering offal' (腐って土になりつつあるごみくず) の間をつまづきながら進まねばならない。雨、湿気、ごみが、今のスティーヴンの置かれた環境である。下落、衰退、腐敗に瀕して、よろよろしながら知の殿堂に向かっている。この状態を、若いスティーヴンはつらいと認識する。これを、'an ache of loathing and bitterness' (ひどい嫌悪と苦々しさの痛み) を感じたとして表現する。語り手には、そこに「プライド」の問題があると見つめていることも明らかな箇所である。境遇に対する痛切な嫌悪感、苦痛の叫びが、狂った修道女の叫びで増幅される。こんな境遇に陥っていることに怒りを覚え、父母の発する音やつぶやきも狂気の修道女の叫びも、'offending and threatening to humble the pride of his youth' (彼の若さからくる高慢の鼻をへし折ろうと、傷つけ、脅かす) 声ととらえているスティーヴンであるという提示である。

スティーヴンの貧困の状況が、感覚的、触覚的、聴覚的に語られるのに対して、『アンジェラの灰』で、マコートの貧困状況の描写は、やはり、感覚的、触覚的であり、また、嗅覚的であると同時に、多弁である。

Mam stays in the bed all day, hardly moving. Malachy and I fill the twins' bottles with water and sugar. In the kitchen we find a half loaf of stale bread and two cold sausages. We can't have tea because the milk is sour in the icebox where the ice is melted again and everyone knows you can't drink tea without milk unless your father gives it to you out of his mug while he's telling you about Cuchulain.

The twins are hungry again but I know I can't give them water and sugar all day and night. I boil sour milk in a pot, mash in some of the stale bread, and try to feed them from a cup, bread and goody. They make faces and run to Mam's bed, crying. She keeps her

face to the wall and they run back to me, still crying. They won't eat the bread and goody till I kill the taste of the sour milk with sugar. Now they eat and smile and rub the goody over their faces. Malachy wants some and if he can eat it, so can I. We all sit on the floor eating the goody and chewing on the cold sausage and drinking water my mother keeps in a milk bottle in the icebox. (36-37)

ここに描かれているのは、父親が特別かわいがった妹の Margaret が、まだ幼くして突然、死んでしまった時の一家のようすである。父親は外に出かけてしまい、母親は打ちひしがれてベッドから起き上がることができない。最年長で長男のマコートは、双子の弟たちに空腹がられ泣かれるので、すぐ下の弟も手伝わせて、まず、ミルクびんに水と砂糖を入れて飲ませる。それでは足りず、双子はすぐにおなかをすかせるが、台所にあるのは、「かび臭いパン半切れ」、アイスボックスの氷が融けて「酸っぱくなってしまった牛乳」、「冷たいソーセージ2本」だけだ。それでも、母親に世話をしてもらえない双子が泣くので、酸っぱくなった牛乳を温め、かび臭いパンをつぶして入れて、しまいには砂糖で酸味を消してしまうという大工夫をして、食べさせる。マラキも食べ、マコートもそれならと食べる。

このような極貧、悲劇の極みを、周囲の隣人たちが、貧しいなりに助けてくれるようすも描かれている。イタリア系移民、ユダヤ系移民たちである。彼らのことばが、音に合わせてつづられており、たどたどしい英語が、かえって、善意の人々の素朴さを伝えている。

Oh, Frankie, Frankie. I said that was one sick child. Malachy is clutching himself. Have to pee. Have to pee.

So, pee awready. You boys pee and we see you mother.

After we pee Mrs. Leibowitz comes to see Mam. Oh, Mrs. McCourt. Oy vey, darlink. Look at this. Look at these twins. Naked. Mrs. McCourt, what is mazzer, eh? The baby she is sick? So talk to me. Poor woman. Here turn around, missus. Talk to me. Oy, this is one mess. Talk to me, Mrs. McCourt. (37)

ユダヤ系移民の Mrs. Leibowitz (リーボヴィッツさん) が、貧しいながらも助けてくれているようすである。リーボヴィッツさんのことばから、双子が裸でいることがわかる。多産多死、赤貧という厳しい現実が描かれていく。しかし、単に暗く悲しく書いてはいない。赤ん坊の

妹が死んだのだが、その上の、ようやく立ち歩きだしたばかりのまだ幼い双子たちは、それが理解できないし、マコートのすぐ下の弟も3歳。おしっこもしたくなる。そこに、どんなに悲しいさなかでも、人は生き続け、生きるには、食べて排泄しなくてはならない、生きているとはそういうおかしなことなのだという現実を書き続けていくのである。こうして、読者を笑いながら泣かせる。

マーガレットの死の時の話は、さらに過酷なマコート一家のようすを書きつけていくことになる。子を亡くして狂乱状態になっている母のすがたとことばを記述していく。

Oh, Jesus. She won't let my hand go and I'm frightened because I've never seen her like this before. She's saying Frankie only because it's my hand she's holding and it's Margaret she's thinking about, not me. Your lovely little sister is dead, Frankie. Dead. And where is your father? She lets my hand drop. I said where is your father? Drinking. That's where he is. There isn't a penny in the house. He can't get a job but he finds money for the drink, money for the drink, money for the drink, money for the drink. She rears back, knocks her head on the wall and screams, Where is she? Where is she? Where is my little girl? (37)

わずか7週間で女の子を亡くした悲しみに、夫が支えになってくれないどころか、働かず、飲酒に金をつぎこむ、と嘆いて狂いそうになっているアンジェラである。語り手の少年の語る地の文に、母親の発話部分が、引用符なしに地続きにはめこまれている。地の文をとばしてそのまま、突っ込んである。‘Your lovely little sister is dead, Frankie. Dead. And where is your father?’ や ‘I said where is your father? Drinking. That's where he is. There isn't a penny in the house. He can't get a job but he finds money for the drink, money for the drink, money for the drink, money for the drink.’などは、伝達文と引用符のつけられていない被伝達文で直接話法である。このような話法の破格な組み込み方で、視覚的にも聴覚的にも、語りがどんどん流れ、スピード感をもっていく。全体が口語調になり、記録が正確な、現場をより伝えるリアル感を与える文章になっている。その分、やっと授かった女の子をあっという間に亡くしたアンジェラの悲痛な気持ち、頼りにならない飲酒癖のある夫へのやりきれない怒り、自己抑制などしてられない嘆きが、文章全体からほとぼり出て、読者の胸を強烈に打つ。

このアンジェラと子どもたちを、リーボヴィッツさんがスープで癒してくれる。アンジェラも子どもたちも、

温められる。そこでマコートは、‘My mother never makes soup like this and I wonder if there's any chance Mrs. Leibowitz could ever be my mother.’ (38) と思ったり、‘I wish little Margaret could be here for the soup. I could give it to her with a spoon the way Mrs. Leibowitz is giving it to my mother and she'd gurgle and laugh the way she did with Dad.’ (38) と思ったりする。語り手の少年が、まだ4歳の幼さだからじゅうぶんに状況を把握していないのだ、と納得しながら、かえって、いかに底辺で生活しているかがうかがえるところであり、また、少年の状況への理解と同時に、彼のやさしさが伝わり、心を揺さぶられるくぐりである。

冒頭 (p.11) からわずか30ページもいかないところでも、以上のような悲喜こもごもの記述が続き、ブルックリンのスラムの子どもたちの日常が子ども視点で活写されているのが、『アンジェラの灰』である。

このあと続くのは、おむつがろくにない双子が、「天にも届くほど臭っている」と気づいたもう一人の隣人に助けられる場面で、嗅覚的になり、そのために、原始的レベルの笑いを誘っている。助けられるのは、同じアイルランド系移民のMinnie MacAdorey である。リーボヴィッツさんとミニーは、4人の子どもたちがネグレクトされていることをアンジェラの従妹たちに知らせ、従妹たちはアンジェラの母に手紙を送り、アンジェラ一家は、彼女の母親の送金で、アイルランドに戻るようになっていく。

以上でわかるように、『アンジェラの灰』は、子どもの状況の悲惨さを子ども視点で描いたところに、大きな意味がある。また、単なる悲惨の記録ではなく、おかしみをふんだんに隣り合わせている。読者に、極貧状況の現実直視をせまると同時に、ユーモアやスカトロジーで笑わせる。さまざまな笑いの技法が駆使されている。悲惨な状況を見聞させながら、同時に仕込んだ哄笑を誘う要素で、爆発的なエネルギーを感じさせ、癒していく。

兄弟のようすを描くことで子どもの悲劇的状況を、センチメンタリズムとセンチショナリズムに陥るぎりぎりの線でとどまって記している例が、以下にもある。

双子の片方、金髪の Oliver が熱を出して死んでからの、双子のもうひとり、Eugene のようすを描いたくぐりである。

I know Oliver is dead and Malachy knows Oliver is dead but Eugene is too small to know anything. When he wakes in the morning he says, Ollie, Ollie, and toddles around the room looking under the beds or he climbs up on the bed by the window and points to children on the street, especially children with fair hair

like him and Oliver. Ollie, Ollie, he says, and Mam picks him up, sobs, hugs him. He struggles to get down because he doesn't want to be picked up and hugged. He wants to find Oliver. (81)

兄弟の死、あるいは、そもそも人の死が子どもに「わかる」ということはどのようなことだろうか。人は病気がひどいと「死ぬ」ことがあることを、子どもは経験で「知る」ようになる。マコートは、赤ん坊の妹の死を、それまで経験していた犬の死に引き比べて「理解」した。あるいは、さっきまで元気だった人が、急に物を食べることも笑うこともなくなり、動きがいつもと違ってきて、具合が悪そうになり、病院に運ばれ、もう帰ってこないと大人に言われたら、その、帰ってこないことを「受け入れる」ということも、死がわかる、ということのひとつだろう。マコートは、オリヴァーが助からず、もう家族の中にもどらないことを受け入れた。しかし、と続けてマコートは、ユージーンが受け入れられずオリヴァーを探そうと、呼ぶ声を追っている。その記述が、読者の心を打ち、若い死者たちを悼む気持ちを起こさせる。兄弟のようすから、いかに悲惨な子ども時代であったかをあぶり出して印象付け、読者の次の行動を招く技法なのである。受け取った読者は、こんなたいげな幼児が、なぜ死ななくてはならないのか、どれほど当時の貧困はひどかったのか、衛生状態はどうだったのか、医療はどうなっていたのか、父親はなぜ飲酒におぼれたのか、国は、社会は、と疑問をどんどん抱かせられる。そして、本書の最初の一節に、もういちど、立ち返る。

People everywhere brag and whimper about the woes of their early years, but nothing can compare with the Irish version: the poverty; the shiftless loquacious alcoholic father; the pious defeated mother moaning by the fire; pompous priests; bullying schoolmasters; the English and the terrible things they did to us for eight hundred long years. (11)

「貧困、アルコール依存症の甲斐性なしで多弁な父親、炉辺で嘆くだけのうちひしがれた信心深い母親、尊大で華やかな神父たち、いばりちらす教師たち、イングランド人と彼らが800年の長きにわたりアイルランド人にしてきたひどい子ども」、これらほど悲痛なこと (woes) は無い、と作者は最初に主張している。彼は、アイルランドのカトリックの子どもたちが、この世でいちばん悲惨な、みじめな状況であったことを、この語りで実証しているのである。かつ、その原因を、最初に特定していた。貧困という難儀な状態を作り出す原因は、政治と宗教と

そして教育である、と。つまり、本書は、1930 - 40年代のアイルランドのスラムのカトリック教徒の子どもたちの悲惨は、イングランドの植民地支配という政治状況、カトリック教会の組織的な問題、教育界の暴力体質が原因していることを立証するという社会的な意図を持ったノンフィクション作品である。この目的という点で、ジョイスの『肖像』が、現実を素材に活かしながらもあくまでもフィクションとして構築された、文学という芸術の分野で革新をもたらすことをもっとも重視した作品であったのと、大きな相違を持っていた。このことが、『アンジェラの灰』でマコートが兄弟のようすから貧困とその悲劇を描く手法を選んだ意味を問わされる中で、明らかになっていくのである。

5. 宗教：カトリック教会への疑問、宗教対立の克服

『肖像』の主人公ステイヴンは、前述のように、イエズス会の経営する学校に入り、厳格な教育を受ける。教師は神父で、その教えは絶対だった。しかし、たいへんな勉強をし、哲学を学び、思索し、思春期に入り、第2章末で身体的な欲求に従う経験をした後に、変化をきたす。静修で、罪を悔いよと迫る神父の恐ろしい説教を聴き、告解したステイヴンは、急激に、それまで信じ切ってきたカトリックの教えに全面的な肯定ができなくなってしまった。「純潔を失う罪」を「犯した」ことへの慙愧の念をステイヴンが強烈に感じ、震え上がらせられた説教のことばが、第3章に連綿とつづられている。それだけに、16歳のこの時の告解は緊張感あるものであったのだが、あれほど厳しく見えた教え、'order and obedience' (秩序と服従) (IV. 522)の長年月が、肉欲に簡単に崩されたことが、急激に信じる気持ちをあせさせてしまうのである。カトリック界のエリートであるイエズス会師になるという夢も、ほんやりとしたものだったと感じて、耳傾けてきた神父たちの話も、'an idle formal tale' (根拠のない形ばかりの作り話) (IV. 529)だとわかった気がしてしまう。むしろ、'He was destined to learn his own wisdom apart from others or to learn the wisdom of others himself wandering among the snares of the world.' (IV. 532-35) と思い定める。猥雑な現実の巷に「墮ちて」歩き回り、そこから、自分ひとりが世界中の知恵を学び、民族の新しい魂を鍛え上げ創造することこそ、自分の生きていく道だ、と思い至ったのである。ここに、ステイヴン、あるいは「ステイヴンという登場人物」に仮託したジョイスの、人間観からくる世界観、生き方の転換が見られる。自由をこそ第一の生きがい、最高の目標と据えたところ、また、自らの判断を

最高のものと評価したところ、心身併せ持って生きるのが人間にとって最高と判断したところに、ジョイスの自己確立が完成している。そして、その点が、ジョイスを19世紀から遠く20世紀の精神的代表のひとりとされる根拠を造っていくのであった。

スティーヴンは、カトリック教会への信仰をなくしたことを、母に正直に言う。長男の彼をやがては自らの信仰するカトリック教会の高位の司祭にすることが、母には夢だったのであろうが、規範や教義に対する信仰を失ったあとも教会に深いところで教育されている彼は、律義に、儀式を拒否する。信じていない者は、一部であれ、演技として儀式をすることは許されない、許さない、というまじめさである。

カトリック教会を離れていくスティーヴンだが、神父たちに教わった知識と教養は、彼の血肉となっている。ギリシャ、ローマからのヨーロッパの哲学と文学が、彼の思考と感情に脈々と流れ込んでいる。また、1900年前後のアイルランドの社会情勢も、彼の友人関係をはじめ、影響を与えずにはいない。第5章の日記部分には、聖書に出てくる聖人やキリストにまつわる話などへの言及、アイルランド西部とアイルランド語（ゲール語）やW. B. Yeatsへの言及がひしめきあっている。最終的に、汎ヨーロッパ的な視点を持ち、次のように高らかに記す。

She prays now, she says, that I may learn in my own life and away from home and friends what the heart is and what it feels. Amen. So be it. Welcome, O life! I go to encounter for the millionth time the reality of experience and to forge in the smithy of my soul the uncreated conscience of my race. (V. 2786-90)

この文中の'soul'という語を見れば、スティーヴンがまだ、唯物論者になっていないことが判明する。最後の'my race'という語から、自民族への愛着が確認される。彼の文学の方法は、自らの人生に学ぶといういきかたで、彼の芸術の目的は、自民族の「良心」か「意識」を「鍛造する」ことだと宣言している。若い誇り高い決意表明であるが、あくまでも、生真面目で、誠実で、本質的に宗教的であるとみなされてよいだろう。

いっぽう、『アンジェラの灰』のマコートは、スティーヴンと同じような体験をする。

初告解のときは、クーフーリンの結婚の話をして司祭に笑いをこらえさせる(126-27)。いちばん下の弟Alphieが生まれたとき、北アイルランドにいる祖父が祝い金を郵便為替で送ってくれたのを、郵便局で受け取るなり、父親はマコートと弟マラキを帰らせ、姿を消してしまう。母がリムリック中のパブを探して来いというので、マコ

ートは必死で探しまわるが、父はどうしても見つからない。あまりにも空腹になったマコートは、酒場で寝込んでいる男のそばのフィッシュ・アンド・チップスに、つい手を出してしまう。罪の意識にさいなまれ、その足で、ドミニコ会の教会に行き、神父に告解する。なぜ盗ったのかと問う司祭に、祖父が新生児のために送ってくれた5ポンドを使って父が飲んでいて、家には何もなくて、母がパブにいる父親を探してくるように言ったのに、どうしても見つけれず、何もお腹に入れてないので空腹で盗んでしまったと答える。'I stole the fish and chips. I'm doomed.'と彼が言うと、神父は、'You're forgiven. Go. Pray for me.' (185)と告げる。この段階までは、マコートはまだ、カトリック教会のあり方を分析していない。

『アンジェラの灰』の最後のほうで、もう二度、マコートの告解の場面が描かれている。翌日は16歳という夜、伯父がパブで一杯おごってくれる。くらくらする頭で、イエズス会の教会の司祭館のベルを押し、告解しようとする。しかし、酔っているなどと言って、ファーザーではないブラザーだという人物に、拒絶される。暴力的なことばを投げかけられる。クリスチャン・ブラザーズ学校に行かせてもらおうと母親が教会に彼を伴って頼みに行った時に眼前でドアを閉められたから、今度が二度目だった。彼は、このことを記憶し、記録する。裕福な階層を相手にするカトリック修道会があり、貧乏人には冷たい、ということ、いやというほど思い知ったからだ。

告解できずにしかたなく帰宅した彼は、母親とけんかする。母がお前の父親みたいだと酔っていることを非難するのへ、お父さんのほうが、母が寝室に登って仕えているLaman Griffinよりましだ、と返答して押し問答になり、しまいには彼は、母のほおを殴ってしまう。この悲惨の極みの翌朝、16歳になった彼は、自分の洗礼名にちなんだフランシスコ教会に行く。教会のなかで、たまっていた懺悔をするより、アッシジの聖フランチェスコ(聖フランシス)に向かって、なぜこれほどまでに苛酷な人生の辛苦をそのままにされるのか、と恨み、責めて、嘆きと空腹のうちに泣き崩れる。そこにフランシスコ会の司祭が現れる。飲酒、母への暴力を告白するが、それ以上のことは語れないし、告解室にも行けないという彼に、司祭は、信徒席のまま、聖フランシスに話すように促してくれる。これによって、マコートは、これまでのつらかった体験をすべて話すことができる。

I talk to St. Francis and tell him about Margaret, Oliver, Eugene, my father singing Roddy McCorley and bringing home no money, my father sending no money from England, Theresa and the green sofa, my

terrible sins on Carrigogunnell, why couldn't they hang Hermann Goering for what he did to the little children with shoes scattered around concentration camps, the Christian Brother who closed the door in my face, the time they wouldn't let me be an altar boy, my small brother Michael walking up the lane with the broken shoe clacking, my bad eyes that I'm ashamed of, the Jesuit brother who closed the door in my face, the tears in Mam's eyes when I slapped her. (344)

それから神父は数分、彼を静かに座って祈らせて、三つの主要な祈りを三回ずつ唱えるように導く。神の愛を説き、自分を赦すように教える。悲惨な境涯に、読者もマコートに赦しを与えようと思わざるをえないところである。神父はさらに、彼が純潔を汚す罪を共に犯したと信じている肺結核で逝ったテレサも、今は赦されて天国にいる、と確信させてくれる。

スティーヴンと同じように、マコートも、教会の教えに背き、罪の意識にさいなまれ、神父に告解して赦しを与えられ、心の平安を得ている。そのことが、きわめて重要なこととして語られている。しかも、二人とも、こののちに、教えから自由になろうとした。スティーヴンはギリシャ文明の視点へ、マコートはアメリカ文明の視点へ向かったのがあった。作者ジョイスも記録者マコートも、カトリック教会の呪縛からみずからを解き放ち、客観視し、新たな価値観を得ていった。いずれも、最後まで、カトリックの「教育」を刻み込んでいたのであるが、ともに、カトリック教会がアイルランド人を悲惨な状態のままにしていることを、陰に陽に、指摘している。特にマコートは、アイルランド人が貧困なのは、教会の縛りがあるからだ、との分析と批判をインタビュー(2007年のRoseのインタビュー)で明らかにしている。

6. 教師の暴力への批判

『肖像』の第1章後半で、スティーヴンは、ころんで眼鏡をこわし、勉強に支障をきたす。親に新しい眼鏡を送ってくれるように頼んだり、Father Arnallに言って、新しい眼鏡が届くまで、読み書きは免除してもらっていた。ところが、'the prefect of studies' (学事長) のFather Dolan がやってきて、'Any boys want flogging here, Father Arnall?' (I.1460) と言うや、事情をじゅうぶんに聞かずに、スティーヴンの手のひらを 'pandybat' (罰で手のひらを打つためのステッキ、むち) で 'smack' する (ピシャリと打つ) (I.1528-40)。この場面は、不当な打擲を受けたことをスティーヴンが校長に訴えに行ったことから、彼の正義感が証明されているところであるとも言わ

れている。それ以上に、ドラン神父の威圧的な懲罰のことばと念のいったむち打ちの罰の暴力性が、スティーヴンの心のなかにくりかえされる不当な仕打ちだという抗議の声が対照されることで、いっそう、際立って見えるのである。

前述の罪を犯した者への強迫的な有名な説教も、ことばの暴力ととらえることができる。つぶさに再現して、スティーヴンそしてジョイスは、少年たちを震え上がらせる説教のすごさすさまじさを伝えると同時に、客観視の機会を読者にも与えずにはいないのである。

ここに、1890年前後のアイルランドの教育の現場に、日常的に暴力が支配していたことが明かされている。また、そのような教師の暴力への違和感が、すでに語られていると解してよいだろう。

『アンジェラの灰』では、教師の暴力への抗議の念が、いっそう明確に出されている。

There are seven masters in Leamy's National School and they all have leather straps, canes, blackthorn sticks. They hit you with the sticks on the shoulders, the back, the legs, and, especially, the hands. If they hit you on the hands it's called a slap. They hit you if you're late, if you have a leaky nib on your pen, if you laugh, if you talk, and if you don't know things.

They hit you if you don't know why God made the world, if you don't know the patron saint of Limerick, if you can't recite the Apostles' Creed, if you can't add nineteen to forty-seven, if you can't subtract nineteen from forty-seven, if you don't know the chief towns and products of the thirty-two counties of Ireland, if you can't find Bulgaria on the wall map of the world that's blotted with spit, snot, and blobs of ink thrown by angry pupils expelled forever. (80)

教師は、皮ひも、籐などのむち打ちの道具を持っていて、子どもたちの手や背中などをぶった。やはりここでも、教育と宗教がひとつになっている。遅刻、おしゃべりが打擲の対象になるだけでなく、算数、地理ができないとぶつし、リムリックの聖人の名前など、宗教的な勉強ができないとぶつ、というのである。暴力を使ってほんとうの教育になるのかという疑問や、恐怖、脅迫で宗教性が涵養できるのかといった疑問までには、教育界も宗教界もまだ至っていなかったと言えるだろう。マコートは、当時のむやみにぶつ教師のあり方に、強く異議を唱えている。これがアイルランドの子ども時代の悲惨のものひとつだと指摘しているのは、前述したとおりである。

7. 罪と罪の意識

同じくアイルランドのカトリック教会に日常的にかかわるなかで、ステイーヴンもマコートも、七つの大罪やモーゼの十戒をはじめ、教会の司祭たちのことばを脳に焼き付けている。特に、「汝、姦淫するなかれ」という教えは、思春期に達した彼らを、厳しく律し、これに違反したときに、たいへんな罪の意識を感じさせられている。なかでも、イエズス会師になろうという意欲もあったステイーヴンの苦悶は、人一倍であった。

しかも、彼らはふたりとも、教会の束縛から離れていった。共通点を持つ彼らは、司祭たちの現実に客観的になり、肉欲を自然な人間的なこととして受け入れ、罪の意識から解放されていく。特にマコートは、司祭たち自身のあやしさを、まさに偽善を記録しないではおかない。まず、アイルランドで今日のパンにも困る貧困にあえぐ庶民たちを集めて、アフリカやアジアの哀れな人々に寄付、献金を、と迫った教会の無慈悲さを書いた。飢えた信者の目に見えた教会の蓄財と矛盾に気付かないではいられない。アメリカに渡る船に同乗した神父が、いかに性的におおらかあるいは教義に忠実でないかを、あっけらかんとスピード感あふれる叙述にして笑い飛ばしてはばからない。いわば、聖職者も俗人も区別なく加わった猥雑なカーニバルという状況を呈している模様を、事実あったこととして語っていく。しかも、こんな状況に放り込まれた若者がどのような道をたどるかを読者に心配させるのではなく、人間とは上下を言ってもこのようなものだと、達観してともに笑うように運んでいく。一面、権威への異議申し立てである。

ステイーヴンを踏まえたジョイスは、やがて、20世紀最高の散文作品と評価された『ユリシーズ』で、ひとりの市民の隠すことのない1日、彼の行動と内的発話をたんねんに記すなかで、宗教を相対化し、性に関する禁忌から文学の伝統を解き放つ。

20世紀のアメリカの自由の精神を自ら手に入れたマコートは、教師の憤みとも言えるユーフェミズムを駆使しながら、おおらかに、少年たちの性と発話を記録している。

罪の意識でマコートにひとつ特徴的なのは、極貧状態での子どもの盗みに関する記述である。幼いマコートが、弟たちのためにどうしても手を出さざるをえなかった食料、どうにも空腹で食べてしまった、酒場の泥酔男の持っていたフィッシュ・アンド・チップス、そして、アメリカになんとしても渡りたくて、金貸しの老婆が亡くなったとき、貸金札といっしょに失敬したお金。これらは、大人の理解や告解やその後の努力や出世で罪がつぐなわれていることになっている。

筆者は2011年の論文で、「三部作は、マコート自己弁護の書にもなっている」と断じた(福岡 2011: 64)。三部作の最初の作、『アンジェラの灰』は、彼の苦難、アイルランドの子ども時代の子どもの悲しさへの理解を求め、犯した罪の赦しを求め、貧困を憎む心を伝えるものである。ただし、実は、これらの大小の盗みは、作者の心の奥深くで、のちのちまで、罪の意識として記憶されており、そのような罪を犯させたものへの、消えない恨みとなっているのではなからうか。それゆえに、くりかえし、自分の犯した小さな盗みの罪と懺悔を記しているのだ。笑いながら忘れない。それが、マコートの『アンジェラの灰』の社会性とインパクトになっている。

結び

これまでみてきたように、『アンジェラの灰』は、明らかに、ジョイスの『肖像』の後継者である。ジョイスが踏まえたジョイス以前の文学と語りの伝統も受け継ぎ、さらに語りを新しくしている。文体の工夫、文学的に革新しようという意欲も引き継いでいる。雄弁な父親の昔話や神話や民族の愛国的な歴史の語りを、マコートも、子ども時代のかけがえのない体験だったと記録している。そして、彼も、偉大な語り手になっていった。マコートもジョイスもともに、父の語りの遺産と父の遺伝子を感じて受け継ぎながら、飲酒癖におぼれて家族を苦難と貧困にあえがせるようになった肉体の父から、次第に独立していった。最後は、母に泣きながら見送られ、海を渡っていく。自立し成人になり、成功することを目指して。

大きな相違は(アルコールに関しては、ジョイスは父の遺伝子を受け継いでひんぱんに酔いつぶれたのに対して、マコートの父の病を受け継いだのはマコートの弟であったにしても)、ジョイスの目指したのが芸術家であり、マコートの目指したのは、そうではなかったという点であった。マコートは、とにかく勉強したかった。軍隊に入って朝鮮戦争やドイツ駐留を経て勉強する資格が得られるや、知識がそこにあるから、大学に行きたかったという。大学に行き、肉体労働をしてかせぐ労働者ではなく、知識や教養を身に着けてそれでかせぐ人間になりたかった。ニューヨークの職業高校教師になってからも、勉強を続ける。理解してくれない妻と別れて、なおも学び続ける。大学院に進み、カレッジの教師になる。マンハッタン南部の、今ではノーベル賞受賞者を複数出している有名高校の、それも、ライティングの教師になり、教師として「成功」した。営々として励んだのちに、努力と意欲が報われたこと。アメリカはそれを可能にしたことを、マコートはことのほか、評価していた。極貧のスラムから身を起し、「今年の教師」に選ばれ、全米

批評家賞につづいて輝かしいピューリッツァー賞をとり、その著書がハリウッド映画になり、大統領に会ったのは、さらにアメリカン・ドリームを実現したことになった。

さて、と読者は思うだろう。世界で最もみじめな子ども時代を送った者は、世界でいちばん成功した立派なおとなになれるという話なのかと。きわめつけの皮肉屋でもあるマコートは、もういっぼう、きわめつけの楽観主義者でもあって、どんな逆境でもなんとか乗り越えてきた経験から、おおらかに、そうだと笑って応えそうだ。

いっぼう『肖像』のステイーヴンは、渡ったのがヨーロッパ大陸、パリだった。ギリシャ精神を尊び、芸術の都パリに行ったのだ。ところが、母親が危篤になり、父親から電報で呼び戻されてしまう。「ダイダロス」になるはずが、高く飛び過ぎて翼をこがして失墜した「イカロス」と同じく、失墜してダブリンに舞い戻ってしまうのである。母の死後は、悶々として晴れない。このいきさつとそのころのことは、『ユリシーズ』へと語りが続いていく。

『肖像』は、イカロスとは異なり、ジョイスが再度、飛び立って、ヨーロッパ大陸にNora Barnacleと渡ってから書いたものだった。1904年にダブリンを発ったころからジョイスは*Dubliners*を書き、1914年に出版し、作家、芸術家になっていた。しかし、『肖像』から『ユリシーズ』(1922年刊)に引き継がれている作中人物であるステイーヴンは、『ユリシーズ』でまだ、『ユリシーズ』の時間と空間(1904年のダブリン)に、創造者ジョイスによって取り残されている。芸術家にはなれていないし、可能性も自意識に反比例して不確かに見える。そこで、『ユリシーズ』の前の『肖像』は、単純な「ビルドゥングスロマン」、つまり、「教養を積み成熟した成功者になった人物の成長記である小説」ではなく、題名から「たぶん、成功した芸術家になる人」の、誕生から成人直前までの成長過程を切り取った「言語芸術作品」と確認できる。

マコートは、ステイーヴンと、というよりは、ダブリンから再度旅立って言語芸術家として成功した作家ジョイスと好一対をなしていたのである。両親が失墜して故郷に舞い戻ったが、息子は親の夢を引き受けて、こんどは自分の「故郷」ニューヨークに舞い戻り、飛翔に成功した。

マコートもジョイスも、その伝記的事実がビルドゥングスロマンになっていた。その意味でも、共通性がある。『肖像』と『アンジェラの灰』を詳細に読み解き比べることで、各々の特質と方向性にかかわる相違もはらみながら、「アイルランド系エグザイル」のこの二作家の、伝統の継承と類似は、時空を超え、はかり知れないことがわかるのである。

引用参考文献

- Books LLC. *English Teachers: Otto Jespersen, Jack Williamson, Jose Dalisay, Jr., Harold Rosen, Frank McCourt, John Curwen, Lucinda Roy*. Memphis: Books LLC, 2010. 21-24.
- Cixous, Hélène. 'The Artist and the Law' in James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man: Authoritative Text Backgrounds and Contexts Criticism*. Ed. John Paul Riquelme. New York: Norton, 2007. 361-366.
- Fukuoka, Machiko. 福岡真知子「フランク・マコートとジェイムズ・ジョイス——文学と教育の間——」『こども教育宝仙大学紀要』2 (2011): 55-67.
- Joyce, James. *Dubliners*. Ed. Hans Walter Gabler with Walter Hettche. New York: Garland, 1993.
- . *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. Hans Walter Gabler with Walter Hettche. New York: Garland, 1993.
- . *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. John Paul Riquelme. New York: Norton, 2007.
- ジェイムズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』丸谷オ一訳. 集英社, 2009.
- . *Ulysses*. A Critical and Synoptic Ed. Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior. New York: Garland, 1984.
- ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ I』丸谷オ一・永川玲二・高松雄一訳. 集英社, 2003.
- McCourt, Frank. *Angela's Ashes: A Memoir of a Childhood*. London: Flamingo, 1996.
- フランク・マコート『アンジェラの灰』土屋政雄訳. 新潮社, 1998.
- . 『アンジェラの灰』(上)・(下) 土屋政雄訳. 新潮文庫. 新潮社, 1998.
- McCourt, Frank. *'Tis: A Memoir*. London: Harper Perennial, 1999, 2005.
- . *'Tis: A Memoir*. London: Flamingo, 1999.
- フランク・マコート『アンジェラの祈り』土屋政雄訳. 新潮社, 2003.
- McCourt, Frank. *Teacher Man: A Memoir*. New York: Scribner, 2005.
- アスマック・エース『アンジェラの灰』東宝, 2000.
- McCoy, Daniel A. 'Issues for Irish Alcohol Policy: A Historical Perspective with Some Lessons for the Future.' *Journal of the Statistical and Social Inquiry Society of Ireland*, Vol. XXVI, Part IV, 1991, 1-43.
- McMahon, Dorren. "Which Kind of Paddy?": A Survey of the Literature on the History, Sociology and Anthropology of Alcohol and the Irish.' *UCD Geary Institute Discussion Paper Series*. UCD Geary Institute, 2008.

- Wachtel, Albert. 'On *A Portrait of the Artist as a Young Man*: Beyond Subjectivity — The Toddler Stephen Theory and the Quest for Truth.' *Critical Insights: A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. Albert Wachtel. Pasadena: Salem Press, 2012. 3-19.
- Academy of Achievement. Frank McCourt Biography. 29 July, 2009. Web. 20 April 2010. <achievement.org/autodoc/.../mcc1bio-1>
- Alcohol Action Ireland: the National Charity for Alcohol-related Issues. 'Overview of Alcohol-related Harm Facts and Statistics.' Web. 5 Jan. 2013. <alcoholireland.ie/alcohol-facts/alcohol-related-harm-facts-and-statistics/>
- 'Allan Gregg: Frank McCourt.' *Frank McCourt/TVO Main*. Published on: 4 Jan. 1997. Web. 2 Jan. 2013. <ww3.tvo.org/video/165196/frank-mccourt>
- '1997 Bill O'Reilly Interview of "Angela's Ashes" Author Frank McCourt.' Web. 1 Jan. 2013. <www.youtube.com/watch?v=a.BNNXBXvc0&feature=endscreen&NR=1>
- 'Charlie Rose-MCCOURT/DOWNS.' *ABC News, 60 Year Montage [ABC]*. Web. 2 Jan. 2013. <www.youtube.com/watch?v=-mxPk7PCxsE>
- 'Frank McCourt.' *Wikipedia*. Web. 9 Feb. 2011. Web. 5 Feb. 2013. <en.wikipedia.org/wiki/Frank_McCourt>.
- 'Frank McCourt, Author of *Angela's Ashes*, Dies.' *Time*. Web. 20 April, 2010. <Time.com/.../>
- 'Frank McCourt, Pulitzer Prize-Winning Memoirist and NYU Alumnus, Dies at 78.' *New York University*. Published on: July 20, 2009. Web. 5 Feb. 2013. <www.nyu.edu/about/news-publications/news/2009/07/20/frank_mccourt_pulitzer_prize.html>
- 'New Lesson from McCourt in "Teacher Man".' *MSNBC*, 2011. Web. 7 Jan. 2011. <today.msnbc.msn.com/.../today-books/>
- 'stuy.edu: about Stuyvesant.' *The online Stuyvesant community*. 2005 Stuyvesant High School. Web. 9 Feb. 2011. <<http://www.stuy.edu/about/>>

(2013年2月6日)